

平成21年2月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 TEL0428-23-6859）

浮島神社の棟札と久保田建設

青梅市の東端に位置する今井地区には、浮島神社が祀られている。平成5年7月に行われた建物の改築に伴う事前調査の際、偶然にも一隅から「懸^{かけ}仏^{ぼけ}」が発見された。懸仏は銅製で、直径約29.5cmの大きさで、周囲にはこの懸仏が永正2（1505）年に鑄造されたことが記されている。さらに、「武^ぶ弐^{しゅう}柚^{そま}保^{のほ}今井村」と書かれていることから、今井村と称される集落が、室町時代の中期にあたる1505年には、既に存在していたことを記録している。

浮島神社には懸仏のほか、修理や改築したことを記録した5枚の棟札が残されている。

最も古いのは文禄3年（1594）のもので、豊嶋殿親子三人と平山小十郎・中山菊太郎が中心になり、そのほか24名が、現世安穩子孫繁昌を祈願して奉納している。

次に古いのは慶長18年（1613）のもので、大工の窪田茂左衛門などが造営している。裏面には豊嶋堪二郎の名前があるところから、文禄3年（1594）棟札に豊嶋殿親子三人とあるうちの一人は豊嶋堪二郎なのであろう。

三番目の棟札は、慶長18年から27年後の寛永17年（1640）のもので、岡部六弥太など五名が施主となり、慶長18年と同じ大工の「窪田茂左衛門」が建立している。

四番目の棟札には貞享2年（1685）の年号が記され、寛永17年（1640）から45年後である。吹上村の塩野三右衛門が施主となっており、この時の大工は久保田庄兵衛佐金久・八郎兵衛嘉胎・伊右衛門親子である。

最後の棟札は宝永7年（1710）に奉納されている。小笠原頼母・その奥方などが施主となり、大工は伊右衛門と理兵右衛門の親子である。

この浮島神社の造営に深くかかわったのは「久保田」大工であるが、その末裔の方が現在も今井二丁目で建築業を営まれている。五番目にある久保田理兵右衛門から何代目に当たられるかについては不明であるが、現在の当主は俊晃氏である。

さて、この久保田家には「本殿の設計図」が大切に保存されている。16枚の小片を合わせると、基礎の部分から鬼板の天端までの高さは約152cm、屋根の最大幅は約129cmであることから、原寸で描かれた設計図と考えられる。

設計図に描かれた本殿は、屋根は春日造軒唐破風付で、頂部には鬼板が載っている。

屋根面が交わる「棟」の^{おがみ} 押^{おし}の部分は非対称であることから、設計の途中であったのであろうか。

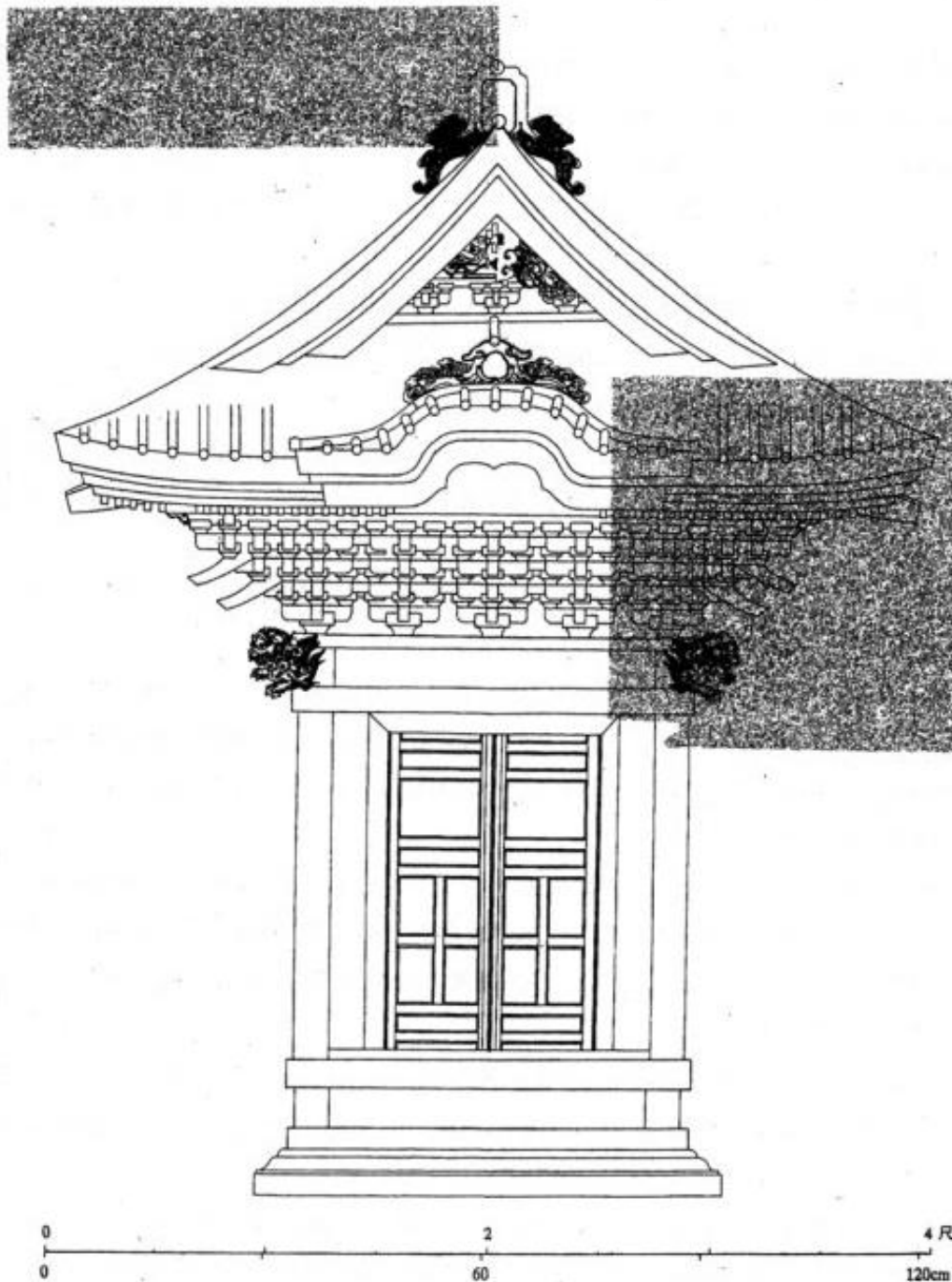
四段の斗^{ときょう}〇（木へんに共）の下に横たわる^{かしらぬき} 頭貫^{かしらぬき}の両脇には、獅子鼻が設けられている。その大きさは延長約10.8cm、高さ9.6cmである。

扉は観音開きで、^{たてかまち}立て框の高さは約 47 cm、幣軸の幅は約 34 cmの大きさである。

(なお、浮島神社の棟札については、「青梅市文化財保護指導員会活動報告書」第 10 号、本殿の設計図については、「同報告書」第 22 号を参照していただきたい。)

(文責 角田 清美)

久保田建築設計図



本殿の設計図

(アミ模様は欠落の部分)